The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

学習者相互のコミュニケーション過程の分析
－談話分析による量的な第一次分析を中心として－

上越教育大学学校教育学部　迎　勝彦
上越教育大学学校教育学部　渡部洋一郎
上越教育大学学校教育学部　野村眞木夫

キーワード：授業分析、談話分析、量的手法、カテゴリー分析システム、コミュニケーション

0.授業分析における課題

授業分析の目的は、授業をできるだけ精細にかつ客観的に観察記録し、分析した結果を以後の授業構築に活かしていくことにある。しかし、精細にかつ客観的に観察し記録するといっても、どう観察記録すればその授業を精細に捉えたことになるのであろうか。同様に、客観的といった場合、どういった要件を満たせばそうした表現が許されるのだろうか。授業分析の歴史は、常にこうした命題を抱えながら授業という実践の構造的な動きを追求する繰り返しであったといってよい。

例えば、日本では、重松鷹泰による分節関連図を用いた授業構造の把握、上田薫のカルテと座席表を用いた子どもの個性的思考の追求、日比裕ら名古屋大学グループによるＲＲ方式(Relativistic Relation Research Method)による子どもの思考体制の研究などが独自の研究成果としてあげられる。これらの研究は、観察の方法がそれぞれ異なるものの、主として記録したデータを詳細に分析者が読み込んでいくという質的な方法を採っている。その一方で、加藤幸次や小金井正巳らによって具体的な検討がなされたフランダースの相互作用分析システムやOSIA(Observational System for Instructional Analysis)は、授業における教師や子どもの発話・行動を数量的に処理し、その特徴を導き出そうとするものであった。

こうした分析の方法にはそれぞれに特徴があるものの、日本における近年の授業分析の流れは、上述したような命題のもと、この質的な分析と量的な分析を如何に統合して授業全体をトータルに捉えようとするかの模索であった。

例えば、柴田(1997)は授業中に出現する「語」の出現パターンをグラフや指標を用いて表し、そこに見出される量的特徴を授業の逐語記録と対照させて質的に分析している。こうした研究は、量的な分析の結果から、授業記録を質的に分析するための新たな視点がもたらされることを具体的に示し得た点で意義深いが、従来主として行われてきた質的な分析に対して、新たに量的な分析をどう統合させていくのか、今日なおその課題が十二分に検討されたとは言い難いのが現状である。

1.量的な分析と質的な分析の問題点

1970 年代の初頭まで、米国における授業研究の主流を占めていたのは、授業者と学習者の行動を観察して、予め設定されたカテゴリーにより分類し、それぞれを量的に分析する方法であった。Flanders（1970）やHough & Duncan（1970）らによる授業行動のカテゴリー化をはじめ、国内においても多岐にわたるカテゴリー分析システムの開発とその適用が試みられている。なかでも、Flanders（1970）により開発された相互作用分析法は、授業の内容を数量的に捉えようとするもので、授業者と学習者の社会的相互作用に関する分析を行い、一定の成果をあげている。この他、例えば国内では、水越（1977）や加藤（1977）などによるカテゴリー分析システムの改良が進められてきたし、大谷尚、松原伸一、八田昭平らによっても、授業逐語記録に基づいた語の出現頻度の分析や遷移マトリックスの作成など定式的な手法に基づいた分析が実施されて

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

いる。これらのアプローチは、観察可能な表出行動のデータを数量的・統計的に処理（大量のデータ処理も可能）することで、分析者の対象に対する関与をできるだけ排除しようとするもので、分析の手続きを明示しその共有可能性を高めるという点において有効性が認められる。

これに対し、質的な分析は授業者や学習者の行動を授業記録に基づいて整合的に解釈しようとするもので、主に面接法、刺激回想法、質問紙法などが用いられる。例えば、Peterson（1982）らによる刺激回想法や吉崎（1991）によるＶＴＲ中断法などは、いずれも授業者に授業を録画したＶＴＲを再生視聴してもらい、場面ごとにおける意思決定の状況について内観報告を求めるものである。当該発話・教授行動がある場面において発現した理由、またはその背景情報や作用因の特定について内観報告をもとに分析を行うのである。グループ活動や話し合い活動にみられるような、授業逐語記録だけでは捉えることの困難な部分の情報を得るという点でも、発話の内容的側面を抽出することの有効性を指摘することができる。

ただし、両手法はそれぞれ次のような問題も内包している。量的分析については、数量化された分析結果が行動や感情の一部を明らかにしても、学習者の認知過程までは明らかにできない（渡辺・吉崎,1991）という点である。また、記録に基づいた定量的な測定を行うため、一斉授業にみられるような全体的なコミュニケーションの分析には適するものの、個別化された学習過程の全てを取りあげることは難しいという方法論上の限界も指摘される。一方、質的分析については、授業事実の同定に際して、その妥当性、信頼性の保証という点で問題が指摘されている。当該事例に即した解釈学的、現象学的手法が重視されるため、分析結果が分析者自身の価値判断や主観性に左右される（または分析そのものに誤差の混入もあり得る）という側面を有するためである。

分析の客観性を高めるためには、それぞれの手法の特性やその問題点について検討した上で、包括的な視点からのアプローチを試みる必要があるといえる。本研究では、談話分析および OSIA を援用した量的な分析システムを構築するとともに、質的な分析との統合をめざしたアプローチの有効性を示すことを目的としている。今回の発表では、その第一次分析として、談話分析に基づく量的な分析手法の適用範囲とその可能性について検討を加えることにしたい。

2.談話分析

本研究では、学習活動時における学習者個々の発話の発現頻度を計量的に測定し、談話の展開過程において、発話の諸機能がどのように発現しているのかを分析的に捉え、併せて当該場面の状況的解釈を質的に行うことをねらいとする。そのため、本発表ではまず一連の作業を談話分析の手法を応用することにより行うことにしたい。談話分析を援用することにより、表面に現れた言語情報を範疇化することで、授業中に生起する個々の現象を整理し、言語的な側面からの計量的な分析を行おうとするのである。

談話分析それ自体は、談話・会話を対象とし、その構造を解明しようとする事実研究である。その性質上、分析に際して恣意性や価値観の介在を極力避けようとし、談話そのものから読みとれる事実のみをデータとした帰納的なアプローチが図られる。ただし、その一方で、メイナード（1993）が指摘するように次のような点にも注意する必要がある。すなわち、「言語、特にその使用面を重視して研究する時には、最初、ある限られたデータを一定の枠組みから分析するわけであるが、その過程で、当初考えていなかったような面の分析が必要になるかもしれない。そしてその分析範囲を広げていくことによって新しい分析法が見つかり、その過程を繰り返していくことによって、分析法の全体像、分析の視点が浮かびあがってくることが多い。」（p.66）という“分析の手法”と“分析されるデータ”との相互依存の関係である。

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

また、戸田（1990）は、言語教育事象を理論的に説明する上での何らかの必然的なファクターが存在するということ、そしてこの現象に内在するファクター、条件を発見し、共通の尺度により比較するための概念装置（カテゴリー装置）を設定することにより、価値媒介を前提とした授業研究が可能になることを示唆している。この意味において、授業実践を対象とした分析を行うためには、それをみるための視点を改めて検討する必要があり、そうすることによりはじめて、談話分析を教育実践場面的側面から意味づけることが可能になるのではないだろうか。

本発表では、この概念装置（カテゴリー装置）を「分析の手法と分析されるデータとの相互依存の関係」という点から問い直し、後述するカテゴリー分析システムの開発を行うことで、教育的視点から談話分析への接近を図ることにしたい。

3.カテゴリー開発

野村（2001）は、発話と発話の間に想定される関係性を範疇化し、これを基準としたテクスト構造の把握を試みている。とくに、マイクロ・メゾ・マクロの三つのレベルを設定したうえで、それぞれのレベルにおいてテクストが構造化される過程を次の二つのシステムを複合させる方法により描写できるとしている。すなわち、①発話を〔提題表現－叙述表現〕の形式に分析し、その連続体として記述する、②発話の関係性を記述する、といった二つのシステムを複合的に観察することで、それぞれのテクストがどのような過程で構造化されているのか捉えるというものである。

発話の関係性に依存しながら、メゾのレベルの分析を基礎にして、マクロのレベルでの組織または構造に言及することが手順の概要となる。これによって、個々の発話がテクストの組織化にどのような貢献をしているのか、あるいはコミュニケーションの参加者がテクストの組織化・構造化の過程においてどのように働きかけているのかを探るのである。発話間の関係がもたらす効果に着目して、その関係をカテゴリー化すると表1のようになる。

表1：発話関係のカテゴリー

類	カテゴリーの種
a 時間	1 時間軸導入
	2 時間軸解放
	3 状況（時間）
	4 継起
	5 同時
b 場所・空間	6 場所・空間軸導入
	7 場所・空間軸解放
	8 状況（場所・空間）
c 心理	9 評価（感情）
	10 評価（感覚）
d 論理・概念	11 一般化
	12 詳述
	13 対比
	14 類比
	15 反復
	16 換言
	17 修正
	18 情報補足
	19 原因・理由
	20 結果・結論
	21 譲歩
	22 保留
	23 反予測
	24 前景提示
	25 背景提示
	26 発話・思考内容
	27 発話・思考解説
	28 評価（価値）
	29 質問提示
	30 質問応答
	31 問い返し
	32 方向付け
	33 情報認識
	34 解釈
	35 交話
	36 呼びかけ
	37 メタ言語1
	38 メタ言語2

ただし、分析カテゴリーの利用にあたっては、本研究の目的・ねらい、および分析対象となるデータの特性に即してシステムそのものを改変する必要がある。分析の手法と分析されるデータとの相互依存の関係に基づきながらカテゴリーの開発を行うのである。すでに述べたように、理論的枠組みとして、談話分析にはその適用範囲に特性がある。つまり、教育学的な事例研究を行うためには、具体的な事象に即したシステムの構築が求められるのである。

発表ではこの点をふまえ、分析対象から得られたデータに即しながら、表1の38種のカテゴリーに改変を加えたものを提出し、この分析システムに基づいた量的な分析を行うことにしたい。

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

4.分析対象

本研究ではグループ学習を中心とした学習活動時にみられる学習者同士の話し合いを分析の対象とする。対象学年は中学3年生（授業期間が前・後期に分かれるため、前期は2年生時の単元；既習の教科書教材との関連からグループごとにテーマを選びブックトークを行う）。ブックトークを創造する過程で行われる話し合い（全3回）およびそのリフレクション（全3回）の過程を学習者を中心とする相互作用過程として捉え、これを分析する。

(1)対象学級：長野県飯田市立H中学校3年1組
(2)授業内容： 国語科
　単元「ブックトークをしようー今までの教科書作品を生かしてー」
　（授業期間：前期 H13 年 2 月 21 日～ 3 月 7 日、後期 H13 年 7 月 5 日～ 25 日の全 23 時間）
(3)対象授業：全 23 時間中の 19 時（第3回話し合い：よりよい発表になるための検討会）、20 時（第3回リフレクション：前時話し合いの振り返り）
　a 第3回話し合い：グループごとに、予め設定した課題についての話し合い（意見交流）を行う。分析のための抽出生は3名。
　b 第3回リフレクション：3回目の話し合いを収録した音声テープとビデオにより確認する。自分の話し合いの課題、発話に着目して振り返り、班員と意見交流を行う。抽出生は同上の3名。
(4)授業者：中原秀樹（教職 16 年）
(5)記録の方法： テープレコーダーおよびビデオカメラを抽出生の属する班に設置。教室の前方と後方にもビデオカメラを設置して録音・録画を行った。なお、授業後には授業者が抽出生に対して内観を求めるとともに、授業者に対しても分析者の方で授業実施に関するインタビューを実施した。

5.分析結果

当日発表資料を参照のこと。

6.今後の課題

学習者相互におけるコミュニケーション過程を量的に分析するための第一次手法として、今回の発表では談話分析を用いた。今後は OSIA を援用したカテゴリー分析の実施も視野に入れている。談話分析が発話と発話の関係性をとりあげようとするのに対して、OSIA は談話のある局面を全体的な視野から捉えようとするものであり、例えば、個々人の発話量や各発話の諸機能を授業全体との関わりから分析しようとする点に特徴がある。両手法とも量的な分析手法でありながら、互いが分析し抽出しようとする要素は異なっているといえよう。それぞれの適用範囲、有効性に検討を加え、量的な分析システムを統合的に構築することを第一の課題としたい。ここで得られた分析結果の出現背景を当該場面の質的な解釈を行うことで状況的に意味づけることが第二の課題となる。学習者（抽出生）および授業者に内観報告を求める（インタビュー、刺激回想に基づく）ことにより、相互作用を通した学習者の認識の変容とその作用因の特定を質的に分析するという手続きをふまえ、これによる量的分析システムとの相互補完をめざしている。

引用文献

加藤幸次（1977）『授業のパターン分析』明治図書/柴田好章（1997）「授業逐語記録を対象とした語の出現のパターンの分析」『日本教育工学雑誌』21(1)/戸田功（1990）「言語教育において方法を問うことの意義ー垣内松三を手掛かりにー」『筑波大学教育学系論集』15(1)/野村眞木夫（2001）「テクストにおける文・発話の関係とテクストの構造化」『上越教育大学研究紀要』20(2)/水越敏行（1977）「理科の発見学習の設計・実施・評価にかんする実証研究」『教育工学の新しい展開』第一法規/メイナード・泉子（1993）『会話分析』くろしお出版/吉崎静夫（1991）『教師の意思決定と授業研究』ぎょうせい/渡辺和志・吉崎静夫（1991）「授業における児童の認知・情意過程の自己報告に関する研究」『日本教育工学雑誌』15(2) / Flanders,N.A.(1970) Analyzing Teaching Behavior,Addison-Wesley. / Hough,J.B. & Duncan,J.K.(1970) Teaching : description and analysis,Addison-Wesley. /Peterson, P.L., Swing,S.R., Braverman,M.T., & Buss,R.(1982) Students' aptitudes and ther reports of cognitive processing during instruction. In: *Journal of Educational Psychology, 74,535-547.*

NII-Electronic Library Service